

平成30年度病虫害発生予報第7号

平成30年8月22日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区 分	農 作 物 名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病（穂いもち）	—	やや少ない
		紋枯病	—	平 年 並
		トビイロウンカ	—	少 な い
		斑点米カメムシ類	—	多い～やや多い
	ダイズ	紫斑病	平 年 並	平 年 並
		ハスモンヨトウ	—	やや多い
果 樹	ナ シ	カメムシ類	—	やや多い
		シンクイムシ類	平 年 並	平 年 並
	共通	ハダニ類	—	多い～やや多い
		カメムシ類	—	多い～やや多い
野 菜	キャベツ、ブロッコリー、イチゴ	ハスモンヨトウ	—	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	—	やや多い

気象予報（抜粋）

1か月予報（8月18日～9月17日：8月16日 広島地方气象台発表）

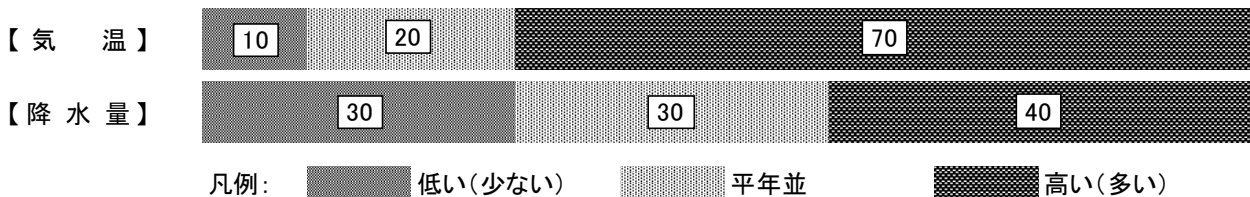
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に同様に晴れの日が多いでしょう。

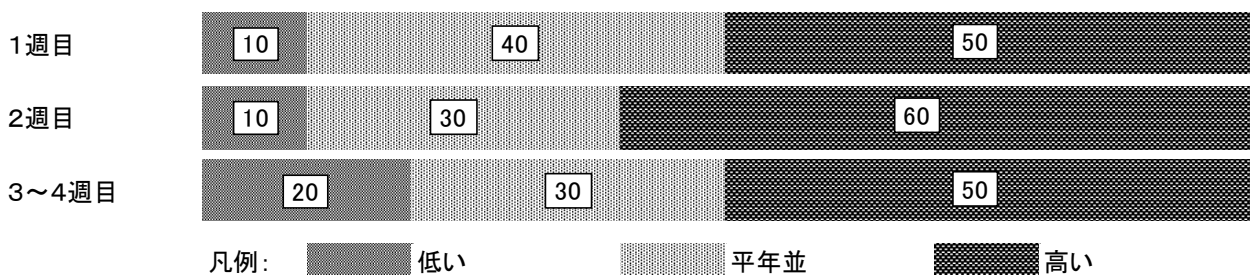
向こう1か月の平均気温は、高い確率70％です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50％です。2週目は、高い確率60％です。3～4週目は、高い確率50％です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(>



<気温経過の各階級の確率(>



普通作物

[イ ネ]

1 いもち病（穂いもち）

（１）予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 やや少ない

（２）予報の根拠

ア ８月上旬の葉いもち発生ほ場率は、４．０％（平年：１９．５％）と平年より低く、その後の病勢も停滞している。

イ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」等の早生品種では、穂いもちの感染時期である穂ばらみ期～穂揃い期が高温少雨で経過したことから、穂いもちの発生は助長されない。

ウ 「きぬむすめ」等の中生品種では、穂ばらみ期～穂揃い期が高温少雨で経過していることから、穂いもちの発生は助長されないことが予想される。

エ 向こう１か月の気象予報から、本病の発生量は平年よりやや少ないと予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア 穂いもちは発生後の防除が困難であるため、中生品種、遅植え等により、これから出穂を迎える地域では、穂ばらみ期および穂揃い期の２回防除を徹底する。

イ 降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後から降雨が３時間程度なければ、防除効果は十分にある。

ウ 上位葉における発病が多く、穂いもちの多発生が予想される場合は、傾穂期（穂揃い期の７～１０日後）の防除を追加する。

エ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などのいもち病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすい。

オ 平成２６年にストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、平成３０年より本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場およびその周辺ほ場における使用を控える。なお、本系統の育苗箱施用剤については、引き続き県内全域において使用を控える。

カ 葉いもちの追加防除を行ったほ場では、農薬の総使用回数を超えないよう十分注意して穂いもち防除薬剤を選択する。

2 紋枯病

（１）予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

（２）予報の根拠

ア ８月９日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は平年並である。

イ 防除効果の高い育苗箱施用剤が普及拡大している。

ウ 向こう１か月の気象予報から、本病の発生に助長的な気象条件となることが予想される。

（３）防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、病虫害防除指針などを参考にして追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 平 坦 部 (特に沿岸部)

発 生 量 少 な い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 現地ほ場での本種の発生は確認されていない。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種の発生は、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度に注意する。特に、ウンカ類常発地において、育苗箱施薬及び出穂前後の防除を行っていない中生品種栽培ほ場及び遅植えのほ場では、注意が必要である。

イ 防除適期は、幼虫発生最盛期の9月第2～3半旬頃と予想される。この時期の要防除水準(成幼虫数10頭/株)を超えたほ場では、病害虫防除指針などを参考にして粉剤などで直ちに防除を行う。なお、散布の際、本種の生息場所である株元に薬剤がかかるように注意する。防除に当たっては、農薬使用基準を厳守する。

4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発 生 量 多い～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月13日現在、現地ほ場における発生ほ場率は86.4%(平年:68.7%)、50回振りすくい取り虫数は11.2頭(捕虫網25往復50回振り虫数、平年:7.4頭)と平年に比べて多かった。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は多い～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月末～8月上旬に出穂期を迎えたほ場(ひとめぼれ、コシヒカリなど)で、穂揃い期～乳熟初期にかけて防除を行っていないほ場では直ちに防除を行う。

また、防除を行ったほ場においても、周辺に発生源の多い場合は防除後も発生状況に注意し、要防除水準を超えている場合は追加防除を行う。

イ これから穂揃い期を迎えるほ場(中生品種など)では、穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生が多い場合には、7～10日後に追加防除を行う。

また、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地、畦畔などの草刈りを行っていない場合は、まず、穂揃い期～乳熟初期に草刈りを行い、草刈り後直ちに防除する。

ウ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので直ちに除去する。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の成熟期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

イ 向こう3か月の気象予報から、本病の発生量は平年並であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除に水和剤を用いる場合は、開花期後25～35日に1回、アミスター20フロアブル2,000倍液(100L/10a)または同剤3,000倍液(150～300L/10a)を散布する。なお、薬液には展着剤を加用する。

イ 防除に粉剤を用いる場合は、スミチオンベルコート粉剤DLを開花期後15～20日及びその10日後の2回散布する。

ウ 紫斑病とカメムシ類を同時防除する場合は、カメムシ類の項を参照する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップによる誘殺数はやや多い。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年よりやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、病害虫防除指針などを参考にして粉剤、水和剤のスポット散布を行う。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、ほ場周辺のみならず、ほ場内での観察も丁寧に行う。

ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数は平年並である。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 紫斑病防除に水和剤を使う場合

(ア) カメムシ防除にネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤を使用する場合

- ・開花期後30～35日(全体の花が終わった時期)の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤(アミスター20フロアブルの2,000倍)とカメムシ防除剤(ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、又はキラップフロアブル2,000倍)の混用で100L/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。

- ・カメムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメムシ防除剤（病害虫防除指針などを参考にして水和剤あるいは粉剤）を散布する。
- （イ）カメムシ防除に上記以外の殺虫剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。
 - ・1回目：開花期後25～30日（全体の花が終わった時期）
紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの3,000倍）とカメムシ防除剤（エルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤などの1,000倍）の混用で、150～300L/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。
 - ・2回目：1回目防除の10日後
カメムシ防除剤（病害虫防除指針などを参考にして水和剤あるいは粉剤）を散布する。
- イ 紫斑病防除に粉剤を使う場合
 - ・1回目：開花期後15～20日後
スミチオンベルコート粉剤DLの3kg/10a
 - ・2回目：1回目防除の10日後
スミチオンベルコート粉剤DLの3kg/10a
水和剤、粉剤体系ともカメムシ類、他の害虫等が多い場合には追加防除を行う。

果 樹

〔ナ シ〕

1 シンクイムシ類

（1）予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

（2）予報の根拠

ア 8月上旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、一部の地点でやや多いものの、全般的には平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想され、ナシヒメシンクイの第4回成虫の発生時期は、平年並の8月中旬～9月中旬頃、モモシンクイガの第2回成虫の発生時期は、平年並の8月上旬～8月下旬頃と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア シンクイムシ類の発生盛期となる8月下旬～9月中旬の防除を徹底する。

イ 薬剤はシペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2,000倍液又はイカズチWDG1,500倍液）、サムコルフロアブル10の5,000倍液、フェニックスフロアブル4,000倍液などを散布する。なお、品種によっては収穫期となっているため、農薬の使用基準を遵守する。

2 ハダニ類（カンザワハダニ，クワオオハダニ，ナミハダニ）

（1）予報の内容

発生量 多い～やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月上旬現在、県予察ほ場におけるナミハダニの発生量は、10葉あたりの寄生頭数は3.5頭(平年:0.9頭)と平年に比べやや多かった。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量が多い～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生密度が高い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。
- イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。
また、ハダニ類は薬剤に対する抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用はなるべく避け、ローテーション散布する。
- ウ クワオオハダニにはダニゲッターフロアブル2,000倍液などを、カンザワハダニ及びナミハダニには前述の剤に加えてスターマイトフロアブル2,000倍液、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。

[共通(ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ)]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 多い～やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月上旬現在、県予察ほ場(園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋)において、カメムシ類の飛来は認められていない。また、サンゴジュ実への寄生もみられていない。
- イ 8月第3半旬現在、県予察ほ場(園芸試験場)における予察灯のカメムシ類の誘殺数は多い。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の加害活動にやや好適な条件が続くため、発生量が多い～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。
- イ 防除のタイミングは、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。
- ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

野 菜

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場(園芸試験場)及び現地ブロッコリーほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや多い。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはトルネードエースDF2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、ファルコンフロアブル2,000～4,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーでは、若齢幼虫期にマッチ乳剤3,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはアクセルフロアブル1,000～2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液などを散布する。

エ イチゴでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはフェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）及び現地ネギほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。この時期を逃すと防除が困難となる。

イ ネギでは、プレオフロアブル1,000倍液、トルネードエースDF1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、プレバソンフロアブル5の2,000倍液、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液などを散布する。

ウ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

＜鳥取県病虫害防除所ホームページ＞

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

＜お問い合わせ＞

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第8号の発表は、9月5日（水）の予定です。